シークレットプリンス

志波一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シークレットプリンス

【Ｎコード】
Ｎ６７８８Ｍ

【作者名】
志波一樹

【あらすじ】
悲劇に咲く一輪の花。エルフレッド王国第一王女、シェルロット・レ・リージア＝エルフレッド。高貴で可憐な彼女の正体は、純真無垢な一人の少年だった。本当の自分を手に入れるまでのタイムラグを今、浮き彫りに。
この物語に悪役はいない。ついでに言うなら不細工もいない。ハッピーエンドを約束する、ささやかな冒険物語。

1、誕生。物語の幕開け

春の国、と呼ばれ、基本一年を通して温暖な気候を持つエルフレッド王国だが、その晩は雪が降った。静寂の中を深々と、まるで、夜明けと共に生誕の時を迎えたその人を祝福するかのように……。

＊＊＊

一人の男が、たった今扉の向こう側に消えた。

一見何の変哲もないこの行動だが、目を閉じればその異様さが分かるだろう。男の一挙手一投足はただ一つの音さえ伴わない。見る者が見れば、彼に武術の心得があり、尚且つこのエルフレッド王城の構造に関して一定以上の知識を持っているであろうことは明白であった。

そんなことはさておくとして。

男は、エルフレッド王国のトップ、即ち国王であらせられる御仁と対面する形で、密かに言葉を交わしていた。

戦乱の世もいよいよ終焉、というこの時代、何処の国も城内は殺伐としたものだった。

かつて平和を謳ったこのエルフレッド王国も例外というわけにはいかず、珍しい降雪の様など誰の目にも留まることはない。

なにしろ、太子であった長男は戦死。次男は元々病弱だったところを心労に祟られて倒れ、三男は遠い異国に身を隠し、四男は敵国に身柄を拘束される。王家はそんな状態だったのだ。

その日、小さな命の誕生を知らされた人物は自然、限られた。

「そうか、生まれたか……」
「はい。健康な男児で」
ふぅと短く溜め息を吐き、その深緑のごとき双眸を閉じるのは、何度も言うようだがこの国の国王陛下その人である。少々やつれてはいるが、背負うオーラには王の風格がありありと感じられる。
「何もこの様な時に……。我が国は跡継ぎに恵まれたものだな」
王は嫌味がちにそう言うと、伏せた視線の片方を、入り口付近に控える男へ向けた。
「して、この知らせが届いているのは？」
「立ち会った一部の使用人以外は、陛下のみに御座います」
寒さのせいか、別の何かか、室内の空気が凍りつく。
「全く戦というものは、一体どれだけの犠牲を出せば気が済むのか……。このままでは、この新しい命もくだらない争いの養分と消えるのであろうな」
「……」
「こんなことが正しいなどとは私も思わない。だが、我が子を失うという事は、己が身を引き裂かれるよりも遥かに苦しいのだよ。……このような勝手な我侭をどうか許して頂きたい」
王は誰にともなく、祈り、俯く。再び顔を上げたとき、その深い緑色をした瞳には確かな決意が静かに、燃えていた。
「伝令！！」
「はっ」
王の短く鋭い声に反応するようにして場の空気が震えるのを、居合わせたたった一人の男は感じる。
「我がエルフレッド王国に第一王女シェルロットが誕生した。城下全域に通達せよ」
「承知致しました」
男が、もう一度音もなく扉を開いた瞬間、このとき既に、物語は幕を開けていた。

2、出発。冒険のはじまり

鏡に映るのは、非の打ち所の無い完璧な美少女。

艶やかで、癖の無い真っ直ぐな長い髪の色は白銀。老人の黄ばんだそれではない。新雪のようなその髪は、光の微妙な加減によってきらきらと明るく輝いた。

瞳は鮮やかにライトグリーン。爽やかな新緑を思わせる二対の宝玉。そして、ツンと立った小さな鼻に、桜色の唇。これら全てが、現実味を持たないほどにまでシンメトリーに配置されている、これまた雪を欺くような小顔。頬に薄く広がる朱が、その出来過ぎた美貌による冷たい印象を打ち消し、少女らしい可憐さを演出していた。

少女の美を飾る謳い文句は尽きることを知らない。金髪碧眼の多いこの地域において、少し珍しい色を纏った彼女は、見る者を惹きつける魅力を持っていた。

「はああ……」

大げさな溜め息と共に、鏡の中の少女は顔を顰める。が、皮肉なことに、その美貌が崩れることは無く、寧ろ一種の色めかしささえ醸し出していた。

「これが自分じゃなければ可愛いとも思えるんだろうけど……」

ぶつぶつと文句を垂れながら彼女はドレッサーから離れ、今度は壁際に椅子を置いて、そこに落ち着くや否や窓を大きく開け放った。

――――時は、戦乱の世の全盛期から十五年たち、戦も数年前にはめっきり減った。

そしてここ、エルフレッド王国にもかつてのような平和が戻りつ

つあったのだ。窓の外から聞こえてくる鳥のさえずりが、それを優しく物語っている。

ふと、静かな中に異色の音が混じった。

「あれは……蹄の。一頭、二頭……」

窓から身を乗り出した少女の髪を、陽光の薫る乾いた風が揺らす。

「？　……馬車！！」

がたんと、何かに弾かれたようにして椅子から立ち上がり、彼女は叫んだ。

そしてすぐに自分の綺麗に結い上げられた髪を振り解くと、手櫛でざっと梳かし、次の瞬間には、纏わり付く邪魔な羽虫を振り払うようにして煌びやかなドレスを脱ぎ捨てた。

クローゼットの扉を勢いよく開け、乗馬のレッスンに使う黒のボトムを取り出して身に着ける。続いて質の良いブラウスに袖を通し、黒のベストを引っ掛けると、衣装ダンスの一番下の引き出しを引きずり出す。そして何の躊躇いも無くその中身を床にぶちまけた。すると、衣服が落ちる音の中、高い金属音が部屋に響く。鞘や鍔に細かい装飾が施された細身の剣だ。これを革のベルトと共に身に着けると、扉を開いて廊下に出、すぐ近くの使用人室から一本の箒を持ち出して部屋へと戻る。窓際に駆け寄り、つい先程まで自身が腰掛けていた椅子を引っ掴んだのは一瞬のことで、ある位置にそれを据え置くなり、上に乗って立ち上がる。手にした箒の柄で天井を勢いよく突くと……どうだろう、タイルがかたんと一枚はずれ、縄梯子が下りてきた。それを上って天井裏に顔を出し、中にあったポーチとブーツを掴み取ってから椅子を降りる。二つを身に着けた後、先程の縄梯子を自分の元へ手繰り寄せ、それを抱えて再び窓に駆け寄る。縄梯子を眼下の中庭に向けて下ろすと、窓枠に足を掛け、弾みをつけて器用に飛び移った。

さあ、丁度目の前を走り抜けていった馬車を追って、一目散に駆けるは、白銀の君。

誰が知ることだろう。これが、一人の王族の未来を拓く、白昼夢のような冒険譚の始まりであるなんて……。

3、任務。説得と懇願

――――亡命した異国の姫君を捜索、保護せよ。
それがこの男に下った命であった。

男、いや青年と言った方が正確か。とにかく彼は、不規則に揺れる馬車の中、馬の蹄の音を聞きながら大きな溜め息を吐く。

「……長旅になりそうだ」
「何が？」
ふいに、あらぬ方向から声をかけられた。
彼が、窓に向けていた目を向かいのシートにやると、白髪に緑の眼を持つ美しい少女が、にこにこと笑ってこちらを窺っているではないか。
「ああ、シエルか……って、シェルロット姫！？」
「へへっ、来ちゃった！」
少女はにいっと白い歯を見せて言った。
「来ちゃった、じゃありませんよ姫！　こんなところで何してるんですか！？　…正確には、何をなさるお積りですか！！　ちょ、止まっ、御者さん馬車止めてください！！」
御者席に伸ばされた彼の手を、少女の白魚のような指が掴んで引き止める。
「お願いっ！！　一緒に連れてって、アル！　ねっ、いいでしょ？」
「無理ですよ！　と、とにかく一旦落ち着いて！　落ち着いてください！！」
落ち着きのない男である。

アルと呼ばれたこの青年、実はエルフレッド王国騎士団総隊長、

アルバート・ルーファスだったりする――この様子を見てそれが分かるような人物がそうそういないであろうことは否定しないが――。

「退屈なのはよく分かりますが、今回は長旅になります。いつ帰れるかすら定かではありません。つまり、この前とかその前とか、もっと前とはわけが違うんです」

会話の隅々から情けない事実がダダ漏れなのだが、彼は気にしていないらしい。

「でも、でもさ……だってぇ」

涙目になる少女に、うっと息を詰まらせるアルバート。彼は、ゆっくり諭すように言い聞かせる。

「いいですか、今回の任務は亡命した異国の姫君を保護することです。二週間ほど前、件の姫君がエルフレッドに入ったとの情報が寄せられまして、騎士団としても第一部隊を国内中に配置するなどの対策をとっていましたが、成果が見られず、私が動くこととなったのです」

そこでアルバートは、一度言葉を切って少女のグリーンアイを見つめる。

馬車が大きく揺れて、流れた前髪がその瞳を覆った。

「さあ、帰りましょう。これでは逃亡中の異国の姫君と同じです、シェルロット姫。どれだけの迷惑がかかることか。私も誘拐犯になどなりたくないですし」

ここまでの会話である程度は察することはできるだろうが、これ以上先延ばしにするのも面白くない。

彼女の名を、シェルロット・レ・リージア＝エルフレッド。正真正銘、エルフレッド王国第一王女なのだ。

正面で、彼女が唇を噛むのを目にし、後一押しとばかりに勢い込んだアルバートだったが……。

「それに、道中何が起こるとも知れぬ長旅に貴女のような人を連れて行くわけには、騎士として……」

（あ、コレ、失言だ）

しかし、時既に遅し。

俯き、拳を握り締め、仕舞いには体を小刻みに震わせて憤慨するシェルロット。……どうやら地雷を踏んでしまったようである。

「子供だ女だ姫だってっ……！！　僕は男だっ！！」

怒りのままに国家機密を暴露するシェルロットを尻目に、慌てて周囲の確認を行うアルバートであった。

4、目的。主従と友情

「すみませんでしたって。……聞いてます？」

あの後、目にじわっと涙を浮かべ、泣きじゃくり出したシェルロット。馬車内に鼻をすする音が響くこと約十数分。

「……許すから、……連れてって」

シェルロットは唐突に交換条件を持ち出してきた。

「それとこれとは話が別っていうか……。また次の機会にしましょうよ。何も今じゃなくたって……あーあーあぁー」

シェルロットの頬に再び涙が伝うのを見て、アルバートは溜め息を吐く。一体彼は今日一日でどれだけの溜め息をついたのだろうか。

座席のシートから腰を上げたアルバートは、シェルロットの前で膝を着くと、その耳元で小さく囁いた。

「分かりました……私の負けです。ただし、勝手にどこかに行かない、我侭を言わない、泣いて騒がない。これが守れるなら……一緒に来るかい、シェル？」

ぱっ、と顔を上げたシェルロット。真っ赤になった顔は涙でぐしょぐしょだ。

———願わくは。今だけでいい、二人を主従関係ではなく、友情が繋ぐように。

「あ、アルっ……！！　ほんとに！？」

「なんだ、行きたくないのか？」

ぶんぶんと力いっぱい首を振って否定するシェルロットを確認したアルバートは、思わず苦笑して立ち上がった。そして御者台に上がり、手綱を握る担当の者と二言三言話した後、シェルロットの方

を振り向いて言った。
「予定変更です。本当なら今日中にはボルデーロに入る手筈でしたが、早めに降りて宿を探しましょう」
「うんっ！！」
アルバートがシェルロットに向かってマントを放る。
「フードも被って下さいね。……君は、目立つから」
それに、そんな泣きはらした顔で街中を歩くわけにはいかないだろう？　とは、言わなかった。

＊＊＊

降り立ったのは、商業の街トビリュース。
屋台がひしめき合いながら立ち並ぶ商店街が、多くの人と物で賑わってどこまでも続いている。

「わぁお……」
見慣れぬ景色に、シェルロットはすっかり感動していた。
今、王城に関わりのある人間は二人の周囲にいない。従って、遠慮もくそもない。アルバートはすぐにでも駆けださんというような様子のシェルロットの手を取り、自分の元へ引っ張り寄せた。しかしその彼の顔にも、隠しきれない笑みが浮かんでいる。
「こっちだ。離れないで」
シェルロットの手を掴んだままに、アルバートは熱気と騒音でごった返す商店街をぐんぐん進んで行き、別の通りに入った。
「ここに宿があるの？」
「そうだ」
「ふうん。詳しいんだね」
先程よりも幾分か落ち着いた雰囲気の通りだ。道の両脇に並ぶのは、どうやら旅籠屋らしかった。

「そりゃあ、任務で国中駆け回ってるから……食堂がある方がいいな」
そう呟いて、彼は一軒の小洒落た宿の戸をくぐった。
「主人、二部屋ほどご用意願えるか」
気の良さそうな宿主の男は、困ったように己の頭頂部を掻きながら言う。
「休日ゆえ、今晩は大変混み合っておりまして……」
「じゃ、一部屋でいいよ、おじさん！」
「シエル！？」
アルバートの背から飛び出したシェルロットは、カウンターに飛びついて勝手に手続きを済ましてしまった。
「一国の王女と同室で寝泊りって……」
「いいじゃん。二人一緒の方が楽しいし！」
“超”がいくらでもつくような笑顔のシェルロットに言われては、アルバートも反論する気にはならなかった。

＊＊＊

西の空が、紫や橙といった幻想的な色を帯びる頃、シェルロットとアルバートは、宿屋の食堂で少し早めの夕飯を取っていた。
「フォードンの森に行こうと思う」
アルバートがスープを啜りながら話を切り出した。
「えっ！？　フォードンの森！？　それってあの、神獣が出るって有名な？　ユニコーンとかグリフォンとか……」
「ああ。それで合ってる」
「でも、フォードンの森って王都から見て北でしょう？　たしか僕たち、東へ移動してトビリュースへ来たと思うんだけど」
シェルロットはフォーク片手に首を傾げる。
「よく勉強しているな。それは別件なんだ。ボルデーロって港町が

あるだろう？　あそこに第一部隊、あーっとだから、件のお姫様の捜索部隊の本部があるんだ。俺が任務を代わるから、お前らはもう撤退していいぞって言いに行くわけ」
「へえー」
料理を口いっぱいに含んで、相槌を打つシェルロット。
「行儀悪いぞ」
「世話役がいないからいいよ。……じゃあさ、アルはフォードンの森に何しに行くの？」
いつの間にか混んできた食堂。表に明かりが灯り、店内にも落ち着いたテンポの音楽が流れ始めた。
「そりゃもちろん……魔術師に会うのさ」
アルバートは、微笑を浮かべてそう言った。

5、追憶。王女と騎士

視線を少し横にずらせば、ベッドの上で静かに寝息をたてるシェルロットがいる。
こうして見ると、とても幼い顔立ちをしているのが分かる。昔から少しも変わらない。いや、たしかに育ち盛りなのだから成長はしている。だが、その無垢な表情が出会った頃のままのようで……。
開けたままの窓から、月明かりと共に風が舞い込んでくる。
アルバートも、シェルロットの隣のベッドで横になり、目を閉じた――――

＊＊＊

――――金髪碧眼。この地域ではいたって平凡な容姿の青年は、さほど美青年でもなければ美丈夫でもない。それこそ、普通としか形容の仕様がない彼に、一つだけ他と違うこと、特色を挙げるとするならば、それは剣の腕だ。
アルバート・ルーファス。
若くして精鋭の第一部隊に身を置き、王国騎士団の最前線で活躍する彼は、将来は総隊長も夢ではないとまで言われるほどに卓越した剣の腕を持っていた。

さて、ここは王城内の一角、騎士団の宿舎である。
その中庭でアルバートは剣を振っていた。ここ数年戦が続いており、一分一秒も無駄には出来ないのだ。

ふと、気配を感じた。背後の木々の方からだ。
平静を装い、変わらず剣を振りながらも、水面下では緊張を巡らせ五感を研ぎ澄ませる。
ここも王城の敷地内だ。その可能性はごく僅かに過ぎないが……。
（侵入者か？）
それは、確実に彼へ向けて近付いてくる。
（走っている……？　というかこれ……隠れるつもりはないのか？）
最早足音は澄まさずとも耳に届いてくる。

「…っ！？」
「うわぁっ！？」
茂みから、何やら白いものが飛び出してきた。アルバートの懐に飛び込んだのは人――子供のようだ。
「も、申し訳御座いません！」
そう言って即座に立ち上がる少女の顔に、美しいライトグリーンの瞳が現れた。
「貴女は……。失礼。どうかされましたか、シェルロット姫？」
アルバートは、実際今のような至近距離から直接シェルロットと対面したことはなかったが、見紛うはずもない。噂に聞くその美貌、現に目前に存在する美少女……。
「何故このような場所に……」
いらっしゃるのですか？　と問おうとしたが、当のシェルロットがアルバートの背に回り身を小さくしたため、それは叶わなかった。そしてほぼ同時に付近から「姫様！　姫様！」と彼女を呼ぶ甲高い声が聞こえてくる。おそらくは世話役の女たちであろう。

「何か、あったのですか？」
アルバートが恐る恐る訊くも、対する答えはあっけらかんとしたものだった。
「今日は歌と踊りの稽古なんですもの。逃げてきたの」

「は、はあ……。しかし、シェルロット姫のお歌は素晴らしいと伺っておりますが」
完全に毒気を抜かれたアルバート。興味を持ったのか、遠慮がちながら首を突っ込んでみる。
「貴方は質問ばかりですのね。……歌も踊りも嫌いよ。お姫様教育なんてうんざりだわ。どうせなら剣術を習いたいものね。……そうだわ、貴方、騎士でしょう？　私に剣を教えて下さらない？」
この小さなお姫様が、とんでもない事を言い出した。
「め、滅相もない！　剣など、そんな物騒なもの……姫様には必要ありません。そのために、我々騎士がいるのですから」
そういうと、シェルロットは腕を組み、頬を膨らませるというなんとも可愛らしい仕草で座り込んでしまった。
「ずるいのよ、皆。ずるい。……独りで勉強なんかしてもちっとも楽しくなんかないわ」
「……恐れながら、姫様。それは当たり前のことです。勉学は楽しむためのものではありませんから」
「だったら私は、毎日毎日勉強漬けの私は一体、いつ、どこで、何を楽しめばいいとおっしゃるの？」
「ならば……」

アルバートはその場にしゃがみ込み、シェルロットの目線に合わせると言った。
「ならば私が、貴女の友人になりましょう。ですから今日はお帰りください。友人は逃げてこなければ会えないものではありません。お世話係の方にもきちんと言って、次の時には堂々と語らいましょう」
ねっ？　とアルバートが促すと、シェルロットもようやく嬉しそうに笑い立ち上がった。

6、真相。秘密の王子様

「友達なら、二人きりの時くらい敬語はやめましょう？　私のことも……姫って呼ぶのはやめて。お母様たちはシェラって呼ぶけど……好きにしてくれていいわ」

彼女は長い回廊を並んで歩くアルバートに向かってこんなことを言い出した。結局、彼がシェルロットを世話役の元へ送り届けることになったのだ。

「ですが、それは……」

真横に視線を流してみれば、案の定シェルロットの大きな瞳が爛々と煌いていた。自分の言葉を彼は間違いなく肯定するのだろう、そう信じて疑わない、あまりにも綺麗で、見方によれば愚かとも取れる眼差し。

アルバートは耐え切れずに視線をそらして――、

「まあ……前向きに検討しておきます」

――曖昧に言葉を濁した。

しかし、その台詞が十中八九交渉決裂を意味するのだと言うことに、きっと二人は気付いていない。

アルバートが新たな話題を模索する中、廊下の奥の方から人の話し声が響いてきた。まさに今、彼らが目指している世話役の部屋からだ。

近付くにつれて、その声も内容が聞き取れるほどのものになった。しかし、その内容とは。

「まったく、陛下もイカれたものね」

「ちょっと、止しなさいよアンタ。もし誰かに聞かれでもしたら、近いうちに首と胴体が今生の別れをするはめになるわよ」

「そうは言ってもねぇ、本当のことじゃない。男の子を女の子として育てるなんて、阿呆にも程があるわ。……欲求不満で、こうやって反抗するシェルロット様の世話をするのは私たちじゃないのさ。迷惑極まりないったら」

「まあ確かに、今はいいとしても、あと何年も騙し続けることは不可能だろうし……。そうなった時、あの子は、一体どうなるのか……。一番気の毒なのは姫様だよ」

アルバートは横を向く。真っ先に飛び込んでくる白銀色に思わず目を細めた。

そして、シェルロットはというと、彼を見つめ返すことはしなかった。ただ、その美しい顔にくどいほど苦笑を浮かべて。

「……折角、友達になれたと、思ったのに、ね？　……さようなら」

彼女は、否。彼は、儚げな微笑をアルバートに押し付けて、たった今来た道を引き返すと、そのまま何処かへ消えてしまった。

＊＊＊

その後、アルバートがシェルロットを見ることはなかった。もともと、一騎士と王女が会うことなど滅多にないのだ。それほど心配することでもないが、アルバートは気にしていた。

あの世話役の話が事実なら。シェルロットは本当の自分を押し殺して、それでも猶、周囲に笑顔を振り撒きながら生きてきたのかもしれない。きっと、そうなのだろう。

悩んでいても仕方がない、と彼は剣を握り屋外へ出た。剣を手にしているときだけは無心になれる。

……でも、もし、シェルロットにもう一度会えたなら、そのときは……。

いた。
中庭に、白いものが。膝を抱えて、俯いたままのシェルロットが。
アルバートは人知れず安堵する。ああ、やっぱり来てくれたんだね。まるで、だいぶ前から、それこそ廊下でシェルロットと別れたその瞬間から、とっくにこの場面を想定していたかのごとく。
「シェルロット姫。……遊びに来てくれたのですか？」
しゃがんで、声をかける。今にも崩れそうな彼の心を壊さぬよう、優しく。

それに随分遅れて、シェルロットはもぞもぞと顔を上げ、そのままぼそぼそと何かをしゃべり始めたのだった。
「知ってるの。……お父様は私を、戦時中に生まれた私を、敵国の標的にされぬよう、女として育ててくれた。今こうして私が生きていられるのはお父様のお陰だし、とてもとても、感謝している。だけど……怖い。他所事の戦争なんかより、どうなるかも分からない未来が、その方が、私にとってはよっぽど怖い。いつも笑ってないと、皆に好かれてないと……なんて。友達がほしいなんて、言い訳かもしれない。近い将来縋り付く拠り処を得るための。……だって、笑ってよ！　私まだ、貴方の名前さえ知らない！　……よくよく考えたら、シェルロットって名前だって本当に私のものなのかどうだか……。教えて、ねえ教えてよ！！　私は、僕は誰なの！？　分かんないよ…どうしたらいいか…」
一気に捲くし立てたシェルロットは、肩で息をする。目が酷く熱くなっていた。
彼は悲鳴を上げていた。でもその悲鳴は他の人よりも少し、華やかで、麗しく、分かりづらい。
「未来は誰にも分かりません、平等に。得体の知れないものとは得

てして恐ろしい。君だけじゃない、俺も。下手すれば、明日任務で命を落とすかもしれない。でも、生きていくしかないんだ。生きることは、傷や死を受け入れることと同じ。この世に生を受けた以上、覚悟を決めなきゃならない。それが生きる意志ってもの。生きる意志もないのに、自分の存在意義を知るなんてこと、出来っこないさ。そう思わない？」

「分かんないよ、ぜんぜん……」

「ごめん、難しいことを言ったね。まあ、こういうのも勉強のひとつ、なのかな」

アルバートは笑った。

「私は、エルフレッド王国騎士団第一部隊所属、アルバート・ルーファスであります。……君の、友人だ」

「……アル、バート……」

颯爽と立ち上がるアルバートの紅白の制服が、シェルロットの赤く腫れた眼に鮮やかに映った。

「確かに、お姫様に剣は似合わない。けど、君は違うみたいだ。剣を、お教えしましょうか？　……シエル」

「はい、あのっ……よろしくお願いします！！」

シェルロットは、自分でも気づかぬうちに最敬礼の形をとって、彼に応えていた。

7、合流。風の人

瞼を開ければ、真っ白な美しい寝顔がそこにあった。
「……」
昨晩、閉じるのを忘れていた窓から入る、朝の風が気持ちいい。
アルバートは、あらぬ方向に蹴飛ばされた布団をシェルロットに掛け直してやり、彼を起こさぬよう、静かにドアを開けて部屋を出た。

＊＊＊

「あーづぅーいぃー！！」

日は高く昇り、二人は長い長い畑道を歩いていた。
「ねえアル。まだなの？　まだ着かないの！？」
目指すは港町ボルデーロ。
「あと半刻も無い。頑張れ」
未だ整備されぬ畦道に、慣れないシェルロットは疲れきっているようで、地面には陽炎が見える気さえしていた。
「無理だって。絶対無理。……あ、とんびだ。もう駄目、馬車がいいよう」
「馬車はトビリュースで帰しただろ。鳶がいるってことは港はもうすぐそこさ」
「……おんぶ」
それでも駄々をこねるシェルロット。それを半眼で見つめるアルバート。二人の間を、爽やかな風が通り抜けた。

港町ボルデーロ。

エルフレッド王国有する“イエリア湾”に面した、貿易の盛んな町だ。自然、入る情報も多くなり、これが王国騎士団第一部隊が姫君捜索の本拠地をここに置いた理由でもある。

「本当に行くの？」
「そのために来たんだ。当たり前だろう？」
この町の役所の前で、二人は揉めていた。
「……僕、あの人嫌い」
アルバートの腕にしがみ付くシェルロット。
「まあ、気持ちは分からないこともないけど……。根っから悪い奴ってわけでもないよ。ただ少し気分屋で、自分勝手で、我侭で、何がしたいのかよく分かんなくて、人の傷口を抉るのが好きなだけなんだ」
「全然、十分、ダメダメじゃん！！」
アルバートの弁解は最早意味を成してはいない。と言うか、彼は本当に弁解する気があるのだろうか。
「とにかく、仕事だから。君はここで待ってる？」
結局最後には首を横に振ったシェルロットだが、半ばアルバートに引きずられる形で役所に足を踏み入れた。

「お？　アルじゃん。何してんの、こんなとこで？」
そう言った青年は、栗色の癖毛を後ろで無造作に束ね、アルバートと同じ紅白の制服をだらしなく身に纏っていた。
「公務だ。言動を謹んでくれ。頼むから……」
「はあーい、ルーファス総隊長！」
この態度には、アルバートも呆れ顔を見せる。年の頃は彼とさして変わらないのだろうが、この青年、水色のくりくりした瞳や、にっと笑う際に覗く白い歯が随分と幼くみせていた。

「……王国全土の第一部隊員に伝令せよ。速やかに城下へ戻り、自分の元の持ち場に就いてほしい」
「御意。つーことはさ、姫君はもうお戻りで？」
「いや。見つからないから、俺が動くことになった。ここから先はこっちで引き受けるよ」
へえ～と空返事をする青年の眼は、アルバートの背後に白いものを捉えていた。
「あっれえ～お姫様じゃん！！　なんでいんの！？　こんなとこに」
びくっとシェルロットが反応したことは、背中越しにもアルバートに伝わった。
「どうしたのさぁ、家出？　だめだよ～王様に心配かけちゃ。帰った方がいんじゃない？　あっ、もしかして俺に会いに来てくれたとか！　いやぁ、照れちゃうなあ」

この青年、エドワード・ヴァミリエル。
彼はアルバートと同期の騎士で、現王国騎士団第一部隊長を務めるほどの男だ。我流でありながらも、高いセンスが光る剣は然る事ながら、彼の名を大陸中に知らしめることとなったのは、型を外れたとんでもない策略家であるが故のことである。
にやにやと、人を馬鹿にしたような笑顔は彼のアイデンティティで、寧ろ彼が笑っていない時は危険であると判断するのが賢明だ。すぐにその場を離れよう。
爽やかな容姿とは吊り合わない意地の悪い一面を持つが、基本掴みどころのない性格をしている。
通称、風の人。とにかく謎の多い人物、それがエドワードだった。

8、旅路。軋む歯車

「で、何故貴方がついて来るのですか？」
そう言うシェルロットの声のトーンは、地の底を這うように低い。
「だって。お姫様と一緒の旅だなんて、このチャンスを逃したらもう二度とないでしょう？」
ボルデーロを発ち、フォードンの森に向けての道中である。成り行きでエドワードを加えて三人となった一行は、騎士団の馬車を借り受け、北へと進んでいた。

「今日はジルダン辺りで宿を取りましょうか」
アルバートが提案する。
「セイレーンの湖の？　馬車じゃすぐでしょう、もう少し先に進んではいかがです？」
と、こちらはシェルロット。
「いえ。ジルダンにしましょう。あそこを過ぎると、フォードンの森まで大きな町がありません。どのみち夜通し馬車を走らせることになりますから、宿があるうちは休んだ方がよろしいかと」
「それもそうですわね」
それから少しの静寂の後、エドワードが言った。

「ねえ、姫様？」
「何でしょうか」
エドワードの方は見ず、車窓を流れる昼下がりの田園風景を眺めながら答えるシェルロット。
「それって、変装してるの？」
「ええ。正体がばれては色々と面倒なので。……貴方のその姫様っていうのも変えて下さると嬉しいわ」
「じゃあシェラちゃんで」

アルバートが微妙な視線をエドワードに送った。
「言葉遣いはそのままでいいの？」
「お前はそれを自分に問うたらどうなんだ」
これにはさすがにアルバートも呆れて、口を挟んだ。
「いやさあ、俺が言いたいのはそうじゃなくて……あー、俺のこと気にしないで、二人ともいつもみたいに自然に話してよ、ね？」
「……」
「……」
「おれさぁー知ってるんだあ。二人が時々待ち合わせて親しそうにしてるの！　いや～絵になるよねえ。で、どうなの実際？　どこまでいった？」
二人は押し黙った。

（（こいつ、全然、空気読もうとしねえ！！））

ムードブレイカー・エドワード。
漸く振り返ったシェルロットは生温い眼で、一人はしゃぐ彼を見つめた。

「あっ！！　見えてきた！　二人とも、セイレーンの湖だよ」
シェルロットは車窓から身を乗り出し、前方を指差して言った。
「シェラちゃーん、調子乗ってると落っこっちゃうぞー」
「大丈夫だよ！」
と、シェルロットは後ろを振り返ろうとして――、
「うわぁっ！！」
――手を滑らせた。
「シエル！？」
アルバートは、上半身が宙に投げ出された状態のシェルロットの右手を咄嗟に掴み、力任せに自分の方へ引き上げる。

しかしその一連を傍観していたエドワードは、にやっと笑って自分の脚をアルバートのそれに引っ掛けた。
「っ！？　……おいっ！！」
崩れたバランスをなんとか立て直したアルバート。彼の腕の中のシェルロット。――――気が付けばそれは、お姫様抱っこだった。
「あっはっは！　もう最高！　文字通りのお姫様抱っこってね」
車内にはムードブレイカーの笑い声が高らかに響いた。

9、危機。暮色蒼然たる刻に

「騎士と姫と言ったら、そりゃ理想のカップルだけどさーあ？　そんな格差婚、この御時勢には認められねえよなぁ」
先程から、話題は専らこのことである。
アルバートにしてみれば、格差に先立つ問題があるわけだが、まさか言うわけにもいかず、
「うるせえ」
の、一点張りであった。

お姫様抱っこ事件（アルバート命名）の後、エドワードは姑を思わせる勢いでもって二人を冷やかした。その結果、話を真に受けたシェルロットは激怒し、アルバート達が今後のための物資調達に行こうと言っても、一人で宿に残ると言い張り、今に至るのである。

「やっぱり心配だ。おいエド、お前一度宿に戻って様子見て来い」
「へ～い。アルは心配性だなあ」
「また火に油を注ぐようなこと言うなよ」
日の暮れたジルダンは、貴重な中継地点として商人や冒険者たちで賑わっていた。

＊＊＊

『ズズズズ…』
シェルロットは、宿屋の近隣にある食事処、カウンターの隅っこに居た。ミネストローネに似たスープを音を立ててちびりちびり食している。王城内では難癖をつけられるような行為で、憂さ晴らしにでもしているのだろうか。
「エドワードのバーカ！　バーカ！　バカバカバーカ！！」

彼の教育係が聞いたら、泣き崩れることだろう。

そんなことはともかく、夜の店内では酒に酔った大勢の人たちが小さな建物を賑やかにしている。そしてその客のほとんどが冒険者なる職業に就いていた。

すぐそこに見えるセイレーンの湖には人魚にまつわる伝説が多く存在し、彼らの目的はこの人魚の血肉である。所謂、不老不死というやつだ。真実の程は定かではないが、魔法の衰退した現在、民衆の大半が信じていないということは確かである。

「やあ、お嬢ちゃん。一人？　こんなとこで何してるんだい？」

丁度今、シェルロットに話しかけてきたグループの男達も、冒険者のなりをしていた。

「あら、ごめんあそばせ。殿方の憩いの場に私のような子供は不釣合いでしたね」

そう言ってこの場を立ち去ろうとするシェルロットの細い腕を、男の一人が掴み、引き寄せた。

「いやいや、とんでもない。むしろ大歓迎だぜい？　丁度華が足りないと思ってたんだ。俺たちと遊んでくれよ。」

強引にシェルロットを引き付けようとする男。彼は抵抗すべく、空いている方の手を腰に伸ばしたが――、

（ああもう、間が悪いっ…！！）

――剣は部屋に置いてきてしまった。

他ならぬ王国騎士団長に教えられただけあって、シェルロットは剣術には自信があった。しかし体術となると、この体格差と人数だ。正直、勝てる気はしないが。

『ガッシャーンッ！！』

シェルロットは手近なテーブル上のブランデーが入ったグラスを手に取ると、力一杯放り投げた。グラスは、男の頭上を通過し、弧

を描きながら天井の照明にぶち当たる。遠心力のせいでグラスの中身が飛び散ることはない。鋭い音をたてて割れたのは、グラスと照明のカバーガラス。店の中を仄かに照らしていた炎は、アルコールに引火し、真下に居た男の衣服に喰らいついた。

「ッ！！　コノ、糞餓鬼！！」

炎を消そうと服に手を伸ばす男。自由を奪っていた手が離れると、シェルロットは店から逃げ出すために体の向きを変えた。だがそこには、仲間らしい男が立ち塞がる。

「良い子はおねんねの時間だ、よッ！！」

「うっ……」

なす術も無く手足を拘束され、中央のテーブルの上へ押し倒されるシェルロット。何か硬いもので後頭部を殴られた。

周りの客たちに助けてやろうなどという考えはなく、寧ろ皆、興味津々とでも言いたげな目で光景を見つめている。

「やめて！　それは、ダメっ！！」

今にも意識が飛びそうな中必死に抵抗の意を示すシェルロットだったが、獣のような目をした男達には最早そんなもの聞こえるわけも無く、彼の服を剥ぎ始めた。上半身が露になると、シェルロットの雪のような肌を見て周囲から溜め息が漏れた。

（それ以上は、いけない。僕は、男であってはならない。国が……父様が……）

皮肉なのは、こんな状況に陥っても自分の心配をすることさえ出来ない彼の心か。

叫び声を上げようとするシェルロットの顔を、誰かの大きな手が卓上に押し付けた。朦朧とする意識。物の輪郭線を幾重にも映し取る不安定な視界でシェルロットが見たのは、表通りに面した窓の外。喧騒のせいで気が付かなかったが、いつの間にか雨が降り出していたらしい。痛む頭部のことも忘れ、そんなどうでもいいことを考えながら彼は、意識を手放す。窓に、一瞬人影が映った。

人々の視線が、否。五感全てが美しい肢体に釘付けとなり、店のドアが鳴らすベルの音に気付いた者など一人も居なかったのだ――。

10、和解。星屑の歌を

……ゴクリ。
生唾を飲み込む音が店内に充満したような錯覚。
男がシェルロットの服、ズボンに手をかけた。焦らすのももどかしく、乱暴な手つきでそれを引き剥がす。
『――――！！？？』
そして、今まで落ち着きの無かったこの空間が、訳の分からぬ静寂に包まれた。先程までの喧騒は影も形も無い。
その理由とは……。

客たちは、シェルロットの一糸纏わぬ美しい姿を目の当たりに、……してはいない。カーキ色のマントが彼に覆いかぶさるようにして、一瞬の内にそこに現れたのである。
「誰だ、てめえ！！」
「騒ぐな…下衆が」
マントの主は、エドワード。
彼は腕の中のシェルロットを労わるように抱き上げて、その生まれたままの姿を衆目の中からそっと隠した。
「…ぬげよ…」
「あん！？」
「今すぐ此処で全裸になれっつってんだよ。…あんたの薄汚えモン、俺が掻っ切ってやる」
傍目には最早、彼が誰であるのか検討もつかないだろう。いつもの飄々とした笑みは見る影もなく、見開いた瞳には鋭い眼光が射していた。
「あんたの女だったのかよ、にいちゃん。そう向きになるなって！
世間知らずのお嬢さんに教育をしてやろうとしただけじゃねえか」

男は軽口をたたきながらも、エドワードの気迫に圧されてその笑顔を引き攣らせる。
「……だったらあんたの方は、命乞いの仕方でも教わっておくべきだったな」
エドワードは腰の剣を抜くべく、柄に手を掛けた。

———パシッ。
「落ち着け、エド」
彼の手を、アルバートが掴み止めていた。
「……アル。悪い」
「いや、謝ることはない。だが君は騎士だ、そのことを忘れるな。……そこの人！　服をこちらに寄越してくれないか？」
放り投げられた衣類を受け止めると、アルバートはシェルロットを抱えたままのエドワードを外へ促した。
「あまり、私の連れをからかってくれるなよ」
「……あんたら、騎士様だったのかよ。助かった……。酔って悪乗りしてただけなんだ……」
呆然とした面持ちで弁解する男を一瞥して、アルバートも二人の後を追った。

「気を失っているみたいだ、頭部を少しやられてる。でも、まあ、他に目立った外傷は無いから、じきに目も覚めるだろう」
言いながらアルバートはエドワードの様子を伺うが、明らかに落ち着きが無い。
「……そう言えば、お前……知ってたんだな、シェルロット姫のこと」
「あ？　……ああ。まあ、ね」
「いつから」
「ん、確か……いや、最初からさ。こんな美人さんに俺の相棒が反応しないんだもん、すぐ気付くっつの」

冗談が言えるほどには落ち着いたみたいだな、とアルバートは胸中で呟いた。

＊＊＊

アルバートは走っていた。シェルロットが見当たらないのだ。

昨日、シェルロットの看病のため夜遅くまで付っきりでいたのだが、いつの間にか眠っていたらしく、明け方、目が覚めればそこにシェルロットの姿は無かった。声を掛けたエドワードの部屋も空っぽだったためそれほど心配してはいないが、万が一ということもある。

ふと、足を止めて辺りを見回すアルバート。何処からか、歌が聞こえてくる。

“Twinkle, twinkle, little star, How I wonder what you are!”

湖の方から漂い来る、美しいその歌声の主を、アルバートは知っている。

“Up above the world so high, Like a diamond in the sky,”

朝露の滴る草木を掻き分けて行けば、目前にはセイレーンの湖が、霧の中に浮かび上がる。穢れの無い、澄んだ声で歌うその人は、湖畔の岩の上に腰掛けていた。その姿はとても幻想的で……。

“Twinkle, twinkle, little star, How I wonder what you are!”

白銀の髪を朝の風になびかせて振り向くシェルロットは、笑っていた。
「この歌ね、遠い異国の童謡で“きらきら星”って言うんだって。歌のお稽古は嫌いだけど、本当は歌うのも、それほど嫌じゃないんだ」
ふうん、と彼の足元で返事を返したのはエドワード。シェルロットを見上げている。
アルバートは二人の姿を認めてほっと安堵の息をつき、邪魔しては悪いと踵を返しながら、耳だけを会話に傾けた。
「ほんとは、分かってたよ。アルの親友だもん、悪い人じゃないって。本当、助けてくれてありがとう」
「いいや」
「……それとね、ごめんなさい」
「何が？」
「見たでしょう？　私の…じゃ、ないか。僕の…」
「僕の？」
「その…」
「その、何？」
「もうっ、意地悪だなあ！！　それ、言わせる、普通？　分かれよ！　あ、コラ、何笑ってるのさ！！　あああー、前言撤回！！　お前なんか、エドなんか大っ嫌いだっ！！」
「あっはっは！　怒った怒った。可愛いなあ、シェラちゃんは」
怒ったシェルロットの叫び声が、すでにこの場を去ったアルバートに届くことはなかった。

11、邂逅。最後の魔法使い

湖面を薄く覆っていた朝の靄はすでに消え去り、シェルロット等一行はジルダンを出発した。

異国の姫君が目撃されたと言うのも、もう何日も以前のこと。動かないものが相手ではないため、急ぐ必要があった。

日が暮れ、夜になろうとも、変わらず走り続ける馬車。また朝を迎え、その日の夕方。漸く目的地であるフォードンの森へと辿り着いたのだった。ここからは自らの足で進むより他に仕方が無いのだが……。

「ねえ、ここ、見たこと無い植物ばっかなんだけど……」
「大丈夫だよシェラちゃん。一国の王女様を前にしたら、植物だろうと動物だろうと自ずから道を譲るって」
「うん。ただ、王女様に前を譲って自分はその子供の影でおっかなびっくり進んでる騎士もどうかと思うんだよね、僕は」
「可愛い子には旅をさせよって話でしょ？　その点シェラちゃんは特別可愛いからね。同じ分だけ旅の舞台もデンジャラスにいこうよ」
「……僕には君の脳内の方がよっぽどデンジャラスに思えるな、エド」

妙に噛み合わない会話を展開している後続の二人のため、アルバートは鬱蒼と生い茂る木々の中、勘と知識を頼りに道なき道を見出してゆく。
「……お？　あったね。ほら二人とも、デンジャラスはもういいから早くおいで」
掻き分けられた背の高い雑草の向こう側、彼が指差す先には、確

かにそれらしい建造物があった。
「見てごらん。あれが魔術師、リタの屋敷だ」
古く小さい木造の平屋で、メルヘンな赤煉瓦の煙突が特徴的である。
三人は薔薇のアーチを潜りその敷居を跨いだのだった。

玄関にて、「面白そう！」の一言でアルバートからノッカーを鳴らす権利を奪い取ったシェルロット。しかし彼が戸口に飛びつくなり――、
『ガツン』
「いらっしゃい！」
――無情にもドアはお開きなすった。
「もう、待ちくたびれちゃったわ。ようこそ我が家へ。ルーファス総隊長殿、ヴァミリエル部隊長殿、それから貴方は、……可憐な騎士殿！　さあさ、どうぞ中へお入りになって！」
一人俯く“可憐な騎士殿”は、幾つかの要因によって顔を赤く染めていた。

＊＊＊

「お初にお目にかかります、闇魔術師のリタよ。よろしくね」
「えっ…！？」
「ええっ！？」
「お弟子さんかと思ったよ……」
アルバートの発言は他二人の心情も代弁していた。何故なら、彼女の外見はどう見ても少女……いや、幼子なのだ。精々7、8歳位であろう。
「……確か、十年ほど前の戦では、エルフレッド王国軍に加勢されたと伺っておりますが……」
愕きを隠せない様子のアルバートが問う。

「ああ、大変だったわね、あの時は。そう、もう十年……」
リタは言う。懐かしむように。
「…はあ…」
異様だ。彼女は明らかに異様なのだ。まるで何処かの国の民族衣装のような服装と、奇抜な髪飾り。何より子供の纏うものとは到底思えない神秘的なオーラ。
軽い混乱に陥る三人を、紫水晶と見紛うばかりの瞳が射抜いた。
「さあて、厄介なことになったわね。急いで態勢を整えましょう。死人が出る前に」
ニコッと子供特有の邪気の無い笑みを浮かべるリタだった。

12、講義。空想には屁理屈を

アンリエッタ・ユウ・シラトリ。それが、件の姫君の御名だった。
彼女は数週ほど前、祖国のポルジェーネ王国から逃亡し、先日、遠く離れたこの地、エルフレッド王国に渡ったと言う。

＊＊＊

「それで？　単刀直入に言いますと、姫君は今何処に？」
リタの屋敷にて、問うのはアルバート。
「パレッタよ。芸術の都、パレッタ」
何の迷いも無くもたらされたその答えに、彼は難しい顔をした。
「それは不味いな。あそこは海沿いだし……、下手したら出国されてしまいますね。そうなれば捜索は振り出しに……」
「あらあら。噂どおりの勤勉さね、総隊長さん。国を出られたら出られたで、貴方は仕事が一つ減るでしょうに。対岸の火事じゃない」
「茶化さないで下さい。事は一刻を争うんですから」
リタの的を得た言葉に苦笑を浮かべるアルバート。
「それもそうね。彼女、精神的にも肉体的にも追い込まれてるわ。生命の危機、と言ったところかしら？」
「！？　……生命の危機って、なんで、そんなこと」
今まで黙って話を聞き流していたシェルロットがいきなり大きな声を上げ、それに驚いたエドワードは椅子から転げ落ちた。
「パレッタに複数の殺気が感じられるわ。どうやら彼女を探しているのは貴方たちだけじゃないみたいね。理由は私には分からないけど」
「なんだよ、魔術師なんて言うから俺、一気にお姫様のとこまでテレポートさしてくれるんだと思ってたのに……」
エドワードが椅子に座りなおし、頭頂部を手でさすりながら言う。

「魔術が何でも出来ると思ったら大間違いです！　勘違いされがちだけど、魔術だってそれなりに物理的、論理的な学問で、不可能なものは不可能な、の、よ！　何なら今此処で魔術の原理を一から説明しましょうか！？」
　リタが、可愛い顔で軽く怒っている中、焦った様子のアルバートが口を挟む。
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　此処からパレッタまでの距離は、ジルダンから此処までよりも長いんだ、そんなことしてる暇は……、今から出発しても間に合うかどうか……」
「ああ、そんなこと？」
　対するリタはきょとんとして言う。
「それなら心配いらないわよ。とっておきの移動手段を用意してあるから、夜明けには着くでしょう。さすがに、何処に居るかも分からぬ他人の元へ、いきなり、三人も、テレポート、なんてのは無理だけど」
　刺々しく言う彼女の視線の先にはエドワードが。あからさま過ぎて最早皮肉でもなんでもない、ただの喧嘩である。
「それじゃ、異議はないわね？　あっても全部却下よ！　リタの魔術基礎知識講座、開講します！」
　ぱちぱちぱちーというシェルロットの拍手は、両隣のあまりのやる気なさに消沈する結果となった。

「さて、魔術を使うにあたってエネルギーが必要となりますが、何のことか分かりますか？　では……シェルロットさん」
　突然の指名に、びくっと反応するシェルロット。
「ええっ！？　僕！？　……ていうか、名前われてるの？　……えっと、エネルギーエネルギーエネ……魔力、とか？」
　にこっと笑いかけたリタに、彼が硬直したのはちょっとしたご愛嬌だ。
「正解です！　でも完答ではありません。シェルロットさんがお答

えになったのは光魔術の場合のエネルギーです。一般に、一口で“魔術”と言う際はこの光魔術を指すのですが、魔術にはもう一つ、隠れた種類があるのです。……アルバートさん、分かりますか？」
アルバートは考え事か何かをしていたようだったが、名指しされると静かに口を開いた。
「……闇、魔術、ですね」
「はい、大正解です！　よくご存知でしたね。魔力をエネルギーとする光魔術に対し、闇魔術は使用者の生命力をエネルギーにするのです」
「どういうこと？」
と、これはシェルロット。
「光魔術は外界、つまり空気中に拡散している、魔力と呼ばれる存在を、使用者が体内に取り込んで、それを媒体にすることによって具現化されます。一方で闇魔術は、使用者の持つ生命力、所謂“寿命”を削って具現化のために消費するのです。このため、昔から闇魔術の使用者は少ないんですねぇ、自殺行為だもの」
げっ、と顔を顰めるシェルロット。“虫も殺さぬお姫様”の片鱗か。
「ところが近年、魔術を信仰するものが減り、空気中の魔力の密度が極端に減少して、光魔術はとうとう滅んでしまいましたとさ、ちゃんちゃん」
待てよ、とここへ来て漸く口を出したエドワード。
「じゃあ、何であんたは魔術が使えるのさ。そもそも俺たちあんたの魔術なんざ見てないぜ。インチキじゃないだろうな」
またそうやって喧嘩腰に……、とシェルロットがたしなめる傍ら、リタは極めて勝気に、意味深な笑みを浮かべるのだった。
「初めに言ったじゃない。それはもちろん、私が……」
「彼女が、闇魔術師だからさ」
アルバートが攫った続きの言葉。シェルロットもエドワードも、未確認生命体を見るような目でリタを凝視した。

「で？　これだけしゃべれば気は済んだ？」
最後、余計な一言を口にしたエドワードが、再び床に転がされることとなったのは余談ということにしておこう。

13、飛翔。竜の住まう森

「ねえ、リタ？　僕、一つ聞きたいんだけど、いいかな？」

三人は、日の暮れた薄暗いフォードンの森を、魔術師の案内の下、ほぼ手探りに近い状態で歩んでいた。ときどき何処か遠くから、ぎゃあと鳥のものとも獣のものともつかぬような泣き声が、いかにもという風に聞こえてくる。

「ええ、どうぞ」

リタが、その容貌の割に違和感を感じさせない、蠱惑的な笑顔で言うのを見とめたシェルロットは、おずおずと切り出した。

「もしかして、勘違いかもしれないけど……その、リタってさ、闇魔術を使って寿命を削られたから……えっと、そんなに、小さいの？」

「う～ん。当たり、とは言えないけど……、あながち間違いでもないわね」

シェルロットの余りの恐縮っぷりには、その表情も意図せず苦笑に変わってしまう。彼女は、足を止め、態々三人を振り返って言った。

「実を言えば、自分に魔術を施しているんです。七歳の時にね。時間を止める魔術。だって、魔術の行使で寿命を失っているのに、自分も成長していたら、両端から命を食い荒らしてることになるじゃない？　……あっ、さっきは説明し忘れましたけど、魔術とはエネルギーに水や火といった属性を付与することで出現するのでして、ちなみにこの場合は時の属性を……」

「んなくだんねえことは、どーでもいいからさ」

エドワードが横から口を挟んだ。

「で？　その乗り物ってどこよ。もう俺たちかれこれ三十分以上歩

いてんだけど」
「すぐよ。……あ、ほらあの樹。あっちに大きな樹が見えるでしょう？　樹齢二千年のアカシアなんだけど、あの上なのよ」
　リタが前方を指差して駆けてゆくのを見ながら、シェルロットは隣を歩くアルバートに小声で耳打ちしてみた。
「ねえねえ、リタって、ほんとは幾つなのかな？」
「さあね。でも、大人の女性にあまり無粋なことを訊いちゃいけないよ」
「大人の女性、ねえ……」
　シェルロットが、遠い目をして呟く間にも、アルバートはリタを追うべく小走りで先を行った。
「ほんと、くだんね。自分の命を何だと思ってんだ。パスタの恋人食いじゃあるまいし」
　後に残されたエドワードが、一体生真面目なのか不真面目なのか。それはシェルロットの知るところではない。

＊＊＊

「紹介するわ。こちらは神竜ディルフォード。この森の主で、フォードンの森っていうのもディルの名に由来するのよ」
　神竜などというが、まさしく神様をこの目で拝んでいるかのように荘厳な姿だった。
　龍の体に大きな翼を持つ、所謂ドラゴンである。古代、生命の頂点に立つ最強の生き物として崇められていた存在で在りながら、凶暴さより繊細さが先立つのは、しなやかな身体を覆う銀色の鱗のせいだろう。優美という言葉が相応しかった。
「すごいよ……。ドラゴンて、いたんだね、今も」

ただただ呆気にとられるばかりの面々だったが。
「まさか、コイツに乗ってくとかふざけたこと言うんじゃないよな……」
ふと気付いたエドワードが心底嫌そうな表情で言う。
「もちろん。そのために来たんでしょ、こんな森の奥まで。…ディル、パレッタまでお願いね！」
気のせいか、ディルフォードがガラス玉のような目を見開いたように見えた。
「おい、こいつも無理だって言ってるぞ」
「人の言葉、理解してるの！？」
身を乗り出して興味を露にしたシェルロットが、エドワードの言葉を遮って言う。
「ええ。ドラゴンはとっても聡明な生き物なのよ。仲良くなりたかったら、たくさん話しかけることね。夜明けには、思いがけず返事をくれるかもしれないわ」
ウィンクするリタ。なんだか、堂に入った仕草だ。
「えっ！！　言葉も話せるの！？　人とは骨格も違うのに……うわあっ！！」
なんと、ディルフォードは自分の首を、あろうことかシェルロットの股座に押し込み、背に乗せてしまったのだ。
「さあ、お二人もお乗りになって。早くしろってディルが焦ってる」
アルバート、エドワードがその言葉に応じると、すぐさま神々しき翼が羽ばたかれ、一行は空へと舞い上がった。

「シェラちゃーん！　おーいっ！」
下で、リタの呼ぶ声が聞こえる。
「キャッチして！！」
彼女は、何か黄金色に光るものをシェルロットに向けて投げた。
「ペンダント…これってリタの…」
リタが身に着けていた、色鮮やかな装飾品を思い起こすシェルロ

ット。
「何かあったら、それを壊して！！　一瞬で駆けつけるから！！」
リタはまた、ウィンクした。遠目では細かな表情まで読み取ることはできなかったが、なんとなく、彼女がそうしたようにシェルロットは思う。
「いってらっしゃい！！」
その声にあわせて、ディルフォードは一気に高度を上げた。そして、宵闇に染まった森の上空を一度大きく旋回すると、風を切って東に向かい、星空の旅に出たのだった。

「……いってきます」
木々に隠されたリタはもう見えない。
それでも後ろを振り返るシェルロットを、風になびく彼の白い髪が邪魔した。

１４、権化。かけられた呪い

遠く地平に沿って空が白みかけ、朝の到来を知らせていた。前方に目的の都市が見えたのはその時だった。

「すごいね、ディル。本当に夜明けに着いちゃった。……ちょっと風が痛かったけど」

シェルロットはフォードンの森を出発してからというもの、ずっとディルフォードの首にしがみついていて、時々、この竜の耳元で何か囁いていた。話せる、というリタの言葉を頭から信じているわけではない。単に好奇心からくるものだ。

結局ディルフォードはここへ来るまで沈黙を通したままだが、別段気を悪くするでもなく、シェルロットは語りかけ続けた。

ふいに、ディルフォードがシェルロットを振り返った。突然のことに少々驚いた彼だが、朝日が昇り、逆光のために黒く見える竜の灰色をした目が、何かを言っているように思えた。

「なに？」

問えば、ディルフォードは長い首を曲げてほんの少し目線を下へずらした。そこには、竜の腕――前脚と言うべきか――がある。

「ん？　手、繋ぐ？」

そう言って、シェルロットが冗談混じりに自分の手を伸ばし、爪の先を掴んだ、刹那。

「えっ……！！」

生まれたての太陽の光を浴びて、ディルフォードの身体から鱗が砕け、花弁のように風に乗って舞い散り、やがて消散した。これは一体どういうことだろう。嘘のような光景の中、突如姿を現したものは、人の形をとっていた。

宙に投げ出され、シェルロットが短い悲鳴を上げる。

「シエルッ」

「あんたたちも！！　私の手を取れ！！」
彼の者が、体勢を崩したエドワードを支えていたアルバートに向かって手を差し出す。
シェルロットはそっと、自分の手の先を確かめてみた。手は、見知らぬ女の人によってしっかりと握られている。
「……ディル？」
「説明は後だ。路地裏に降りる」
言われて顔を上げれば、四人は互いに手を取り合っていた。

＊＊＊

人気のない早朝の裏通り。
地面にふわりと足が着く。その、しっかりした足裏の感触に、彼らも幾分か落ち着きを取り戻していた。
「あの、貴女は？　ディルなの？　ディルはどうなったの？」
始めに口を開いたシェルロットは、女の腕にしがみついて問うた。しかし、答えようとする彼女を邪魔する者がひとり。
「おい、エド。今すぐその鼻から流れる赤い液体を止めろ、みっともない」
エドワードが、鼻から出血を起こしていた。
「む、無理っ！」
「ああっ！　何やってんだよエドワード、きったないなあ！！」
「だって、この状況……」
確かに、エドワードの言うことにも一理あると言えなくもないかもしれない、ということにしておこうか。
目の前のこの女性、中性的な顔立ちのたいそうな美人だった。しかも、全裸だった。しかも、中性的なのは顔だけで、身体は非常に女性的であった。
「あーあーあー。ちょ、血ぃ付いた手こっち向けないで！！　エグイ！！」

騒がしい二人を置いて、アルバートは話を進めようと、黙って様子を眺めていた女性に声をかける。
「君は……シエルのいう通り、ディルフォードってことでいいのかな？」
「ああ。そうだ」
答えは簡潔だった。
「状況が飲み込めないんだ。悪いけど、詳しい話を聞かせてくれるかい？」
ひとつ頷いて、ディルフォードを名乗る彼女は話し始めた。

「これは、私にかけられた呪いだ」
「呪い？」
「ああ。……その昔、人間たちは銀の鱗を欲して私を狩ろうとした。私の鱗は良い武器になるのだそうだ。しかしその頃の私は“銀疾風”などと愉快な名で呼ばれていてね。いつも狩人を上手いこと撒いていた。だが、欲に塗れた人間というものは妙に狡賢くて、私の翼を奪ってしまおうと考えた。少なくない金で魔術師を雇って、私を、まだ年端もいかぬ人の少女に変えてしまったのさ」
「それは……」
アルバートは悲痛な表情を浮かべ声をなくした。
「昔の話だよ。……まあ、案の定ボロ雑巾みたいになった私だが、今はリタの森で彼女の世話になっている。幸い、日のない間は元の姿に戻れるようであるし」
「なんというか……酷いね」
「いや、そうでもないさ。悲観しているわけじゃないが、不自由もないし、私はこれでもかまわないと思っている」
彼女の穏やかなその言葉を聞いて、アルバートも安堵の息を吐き微笑んだ。そして、思い出したように言う。
「それにしても、何よりまず服をどうにかしないとマズイな」

その直後、話し込む二人の背後からくぐもった呻き声が聞こえた。
「先生ー、エドワード君が血を吐いて倒れましたー！」
「こっちへおいでシエル。そして、そのデカイのはうちでは飼えないからもとの場所に捨ててきなさい」

15、緩頬。ウィンドウショッキング

「前以て言っておいてくれれば、あんなにびっくりしなかったのに」
両手に持った衣装を睨み付けながら言うのはシェルロット。街中の衣料品店での会話である。
「そう言われても、夜の私は口が利けん。悪いのは碌に説明もしないリタだ」
「まあね。……ところでディル、好きな色は？」
「黒だ。……だいたい、ほんの数時間で森から都までなどと……。もし辿り着けなかったらどうしてくれるんだ、まったく」
シェルロットは不思議そうな顔で、流れ作業のようにひたすら試着し続けるディルフォードの方を見た。
「でも、空からここまで降りてくるときは、ちゃんと飛んでたよね？」
「あれは、魔術の一種だ」
「魔術っ……」
突然大きな声を出したシェルロットは、店員に睨まれ慌てて声を低くした。
「じゃあ、ディルも闇魔術？　神獣は寿命が長いからいいの？」
「いや、私たちの使うものは恐らく光魔術に属する。神獣は自らの体内で魔力を生み出すことが出来るんだ。ちょうど草葉と同じように。私たちが食事を必要としないのもこのためだ」
「へええ！！」
「ドラゴンは口から火を吐くし、ペガサスは空を飛ぶだろう？　あれもちょっとした魔術と言える」
ディルフォードは、シェルロットの手によって次々と着替えさせられながら、淡々と語った。長命な生き物だ。説明も実に分かりやすい。
シェルロットは、次に王都の生物学者に会ったときに自慢してや

ろうなどと考えながら――要するに、口煩い教師の天狗の鼻を折ってやりたいのである――、またしても疑問にぶち当たる。
「ならさ、その呪いってやつ？　自分の魔術で解けるんじゃないの？」
「ところが、無理なんだ。解呪というものはそれを施すより遥かに多くの力を要するが、私は神獣でいる時間が格段に短く、生み出せる魔力に限りがあるのでね。それほど大きな術は扱えない」
　まるで他人事のような彼女の言葉とは裏腹に、ディルフォードは困った顔で笑っていた。それを見たシェルロットは言葉に詰まる。
「じゃ、じゃあさ、リタに頼んでみたら？　リタならきっとディルのこと助けてくれるでしょう？」
「確かに、そうだろうな。でも、それは出来ない。私などのために、大恩ある人の子の命を無駄にはできないからね」
　自分の首に下げた、リタからの預かり物であるネックレスを見つつ、そっか、とようやくシェルロットは気付いた。
　リタは、古人の叡智を今に伝える最後の魔術師。その命を軽んずることは、決して許されない。無闇矢鱈と魔術を使うわけにはいかないのだ。自分たちが未だに彼女の魔術を目の当たりにしていないことにも納得がいった。

「よしできた！　これに決定！」
　丁度申し合わせたかのように、アルバードとエドワードも店内に入ってきた。
「最初は、ディルには清楚で女の子らしい服が似合うかなーと思ったんだけど、少し話してみたらイメージが固まったよ」
「ありがとう、人の子」
「ひ、人の子って……。まあちゃんとした自己紹介まだだったけどさ。僕、シェルロット。シエルって呼んで？　こんなナリだけど男なんだ。よろしくディル」
「よろしく、シエル。これは人間が付けた名だが、私はディルフォ

ードだ」

ところで、二人が和やかに握手を交わす間、後から来た二人のほうはというと、静かに硬直していた。

「……へえ、何だか随分と、アグレッシブだね」

「ぐ、グラマラスぅー」

この囁き声を離れた位置からしっかりと耳に入れていたディルフォード。このあたりは流石に神獣だ。

「おかしくはないだろうか？　私は、人間の服を始めて着るのだが……」

「ああ、うん。すごいよ」

「うんすげえ」

返ってきたのは中身のない返事。

しかし、似合っていない訳がないのだ。なにしろ相手が人間ではない。元がこれだけ良ければ、洋服など何を着たって似合うものだろう。

「ドラゴンの時の神秘的な美しさをそのまま持ってきたって感じだよね」

とは、シェルロットのコメント。

そして、その彼が選んだ衣装だが、無駄の一切無い、簡単なものだった。トップスに、黒いハイネックのノースリーブ。下は迷彩柄のスカートとロングブーツ。

「イメージは……戦う女、なんて」

と、ここで、今まで呆然としっぱなしであったエドワードが口を開く。

「つまりはシェラちゃんも立派な男だったってことかー。戦う女ってかコレ、ヘソ出し、ミニスカ、ボン、キュッ、ぼ」

「ヴォォォォーンンッ！！」

シェルロットはなんと、予備動作もそこそこに、膝蹴りでエドワ

ードの言葉を遮った。この奇襲に、エドワードは背後のショーウィンドウに思い切り突っ込むこととなり、決して薄くはないガラスが派手な音をたてて割れたのだった。

これを見たアルバートが慌てて財布の中身を確認したことは、最早言うまでもないだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6788m/

シークレットプリンス

2011年12月17日20時52分発行